

第5A(中)分科会 教職員の専門性に関する課題

提案主題 「教職員の資質向上」に向けた教頭の役割

サブテーマ 連携型小中高一貫教育校・研究開発学校における教頭の関わりについて

協議の柱 連携校を含めた各主任、学年部をつなぐ教頭の関わり役割はどうあるべきか

提言者 宇佐市立安心院中学校 北 迫 美 和

1 質 疑

- (1) Q 職員（事務局員、学力向上支援教員、指導法工夫改善教員）の守備範囲は
A 事務局員は、小学校への乗り入れや中学校の授業。学力向上支援教員は他中学校の授業改善に行く。指導法工夫改善教員は英語科で少人数授業を担当。
- (2) Q キーステージ（小中高12年間を新4段階に分割）の決定はどこで行ったか
A 校長会で決定した。

2 協 議

- (1) 小中の乗り入れはなく人権教育などで交流している。中学校から小学校へ乗り入れをしている学校は美術や音楽、数学、英語で乗り入れており、T T形式で授業を行っている。小学校に学力向上支援教員が配置され、中学校区の各校に乗り入れをしている。それぞれ調整は教務主任や教頭がしている。
- (2) 小中高一貫教育連携校の教頭曰く、「各校のベクトル合わせ」が難しいが大切だ。また職員の異動が大きいことで4月当初は苦勞が多い。小中高の連携は安心院・院内のような人的配置がないと厳しい。せいぜい小中でお互いの授業を見合うぐらい。中学校区の小中で分科会を作り、授業規律や体力の目標を共有し、教頭が連絡調整をしている。
- (3) 教頭の役割を中心に意見を出し合った。教頭の役割で調整が一番大切。担当から報告を受け、学年部に繋いだり、教務主任や生徒指導主任などのミドルリーダーに繋いだりした。ミドルリーダーの人選も大切。連携校の調整は学力向上支援教員が担い、校長は関わるが、教頭は報告を受けるのみという学校もあった。協議に加われない。

3 指導助言

- (1) 小中高一貫教育について。何を文科省は研究開発学校に求めているのか、その目的を考える必要がある。文科省は、次の2030年の学習指導要領改訂を見据えている。小中高の12年間を再分割しようとしている。だから4つのキーステージの研究が必要だ。また、なぜ英語をツールとした研究を求めているのか。英語をいち早く、かつ児童生徒の発表のツールにすることで日本語（母国語）の質を高めることが根底にあることを確認し、組織的に研究を進めること大切。その要が教頭である。
- (2) 教職員の専門性を高めるについて。アンディー・ハーグリーブス教授の4つの視点で学校の活動を見直してほしい。活動を提案するときに、「去年もやった」ではなく、「子どもの実態」にに応じて提案すべきだ。いかに教頭が取捨選択、スリム化できるかが大切だ。